

小川未明「白い門のある家」における〈異界〉

道合 裕基

はじめに

小川未明（1882-961）の童話「白い門のある家」は、1925年7月に雑誌『赤い鳥』14巻5号に発表された。この作品では、月夜の晩、仕事で疲れた主人公が、見知らぬ男に案内されて訪れたカフェーで、不思議な体験をすることになる。主人公は、カフェー内で、以前どこかで出会ったことのある人々に邂逅し、良い心持で店を出た。そして、男が住んでいるという「白い門のある家」で別れるのだが、後日、どこにもそんな家がなく、案内されたカフェーも見当たらないという一種の「異界訪問譚」である。

多くの未明童話同様、幻想的なストーリーであり、未明童話中では、比較的知られている作品ではあるが、現在のところ、この作品を単独に採り上げて論じた研究がない。また、この作品には、多くの「謎」が残されたままとなる。例えば、主人公をカフェーに誘った男は、何者だったのか。また、主人公が訪れたカフェーは、いかなる場所であったのか。なぜ、もう一度、主人公は、カフェーを訪れることが出来なかったのか—等々が挙げられる。こうした作中に残る「謎」に対して、舞台となる場所や、時間設定、色彩のシンボリズム等に着目し、象徴人類学・民俗学を文学作品解釈に援用した「文学人類学」的な手法を用いて、「白い門のある家」における「異界」との接触・遭遇について分析する。また、他の未明童話における「異界」像を参照しつつ、この作品で描かれた特異な「異界」像を考察することを本稿の目的とする。

1. 「異界」への通路としての舞台設定

「白い門のある家」の主人公は、仕事で疲れたため、「顔なじみのカフェー」に出かけるが、すでに店が閉まっていたので、見知らぬ男に導かれるままにカフェーを訪れる。そこで、今まで会ったことのある人々に巡り会うという不思議な体験をする。主人公が、こうした奇妙な体験をする伏線が、作中には多くちりばめられている。

まず、作中で何度も強調される「月夜」という設定である。月の光が、人を魅了し、「非日常的」な世界へと誘うことが、人類学や民俗学では知られている。例えば、人体に流れる血液と、海水の主成分が類似しているため、潮汐を引き起こす月から人体も影響を受けるというような説明がなされる。こうした月がもたらす「非

日常性」については、未明の他の作品にも、モチーフとして作中に登場する。¹⁾ 代表作「月夜と眼鏡」（1922）においても、主人公のおばさんの家に不思議な眼鏡を売りにくる男や、蝶の化身が訪れるのも、月夜の晩とされており、「砂漠の町とサフラン酒」（1925）においても、砂漠にさらわれてきた女が、呪詛の念を込め、自らの指の血をサフラン酒に落とす際に、月の描写があり、呪われたサフラン酒が醸成されることになる。このように、未明童話において、月が、「非日常的」な世界との接触のためのモチーフとして機能していることが窺える。

「白い門のある家」でも、「あたたかな、おぼろ月夜」であることが強調され、月光に照らし出される町の光景が、主人公にとって、「ばかに美しくなって」見える。普段、日中では味わうことのない感動を覚え、その原因を、「月の光が、すべてのものを美しく照らしてみせる」からだと考えている。日中とは異なる「おぼろ月夜の世界」を歩くという月がもたらす「非日常性」が描かれるとともに、夜も「非日常性」を強調する。月が登場するので、時間設定が「夜」となるのは、当然ではあるが、この夜という時間設定は、主人公が不思議な体験をすることを補強している。昼が、日照条件等の明るさゆえに、労働・活動の時間である「日常」の位相であるとする、夜は、その暗さや、休息・睡眠等で、活動が低下する時間であるがゆえに、「非日常」の位相に属する。妖怪等の異形の存在がうごめく時間帯の多くが、夜とされることから、夜の「非日常性」は、首肯出来よう。

また、単に夜ということだけでなく、主人公が男に声をかけられる時刻が、「12時前」という日付が変わる寸前ということも、作中に登場する「境界性」と関連する他のモチーフとの繋がりを示している。男とカフェを訪れた主人公は、「12時半」に男とカフェを出て、帰宅の途に就いている。このように、日付が変わる寸前に男と遭遇するという設定は、単に、夜という昼に対応する「非日常的」時間を示すだけでない。その夜の中でも、特に「境界性」を強く帯びた「12時前」という日付の変わり目にする事で、月や夜の「非日常性」を強調する効果があり、奇妙な体験が引き起こされる必然性が示される。

さらに、仕事に疲れた主人公が、飲みたいと思った飲料も、コーヒーとなっており、単に、仕事での疲労を回復するだけでなく、コーヒーの成分であるカフェインによる「非日常的」な感覚を味わいたいという想いも込められている。コーヒーという飲料のもつイメージそのものも、ここでは「非日常性」を補強している。²⁾ こうした「非日常性」を強調する時間設定等が、主人公が不思議なカフェに導かれ、奇妙な体験をする伏線としてちりばめられていると考えられるのである。

¹⁾ 文学作品における「月夜」という設定が、怪異を引き起こす例として、江戸川乱歩の「目羅博士」（1931）や、横溝正史の「かひやぐら物語」（1936）等が挙げられよう。

²⁾ コーヒーは、ヨーロッパにとって、「異教の地」であるイスラム圏から流入してきたという経緯に加え、黒という色彩や、香り、覚醒作用等から「特殊な飲み物」とされた（伊藤2001）。このコーヒーのもつイメージも、作中での「異界」との接触の伏線と言えよう。

2. 主人公が訪れたカフェーについて

2.1. 緑色のカーテンについて

物語の重要な舞台となるのは、男に連れて来られた不思議なカフェーである。主人公にとって不思議ではあるが、どこか懐かしい体験をもたらすことになるカフェーについて、以下に考察していく。このカフェーについては、その建物の外観に関しての描写はないが、入り口や店内の様子が詳細に述べられている。まず、入り口に、緑色のカーテンが掛かっている、花の香りがたちこめていた。そして、店内には、マンドリンの音色が響いている、といった視覚、嗅覚、聴覚などと多くの感覚を刺激する空間であることが示される。ここで、まず、「異界」の入り口としての性格をもつカフェーの入り口に、「緑色」のカーテンが掛かっていたことに注目し、作中での意味について概観していくことにする。

未明童話においては、「色彩語の多用」という特徴が、すでに指摘されており（山口、藤本 2007）、「色彩語の多用」によるイメージの豊穰性を強化する効果が、ここでも見られ、タイトルの「白い門のある家」にしてからが、「白」という色彩語が使用されている。

本作では、舞台となるカフェーの入り口に、「緑色」のカーテンが掛かっているのだが、一般に、「緑色」というと、草花や、樹木の葉の色を連想させ、生命の息吹等の好ましい印象を抱かせる。しかし、その一方、「緑色」は、草木が生い茂る深遠な森を連想させる。森自体は、食料や住居等の素材となる草木をもたらすが、獐猛な獣や盗賊達だけでなく、怪物等の「異界」の存在の棲家として位置付けられる。³⁾

こうした「両義性」を帯びた「緑色」が、カーテンの色として選択されていることは、「異界」との関連を示唆しているように。カーテンは言うまでもなく、室内とその外部との区切りを行う機能をもつ。外界と内部との接点である入り口に設置されるカーテンが、単に、店内と外部を区切るだけでなく、「異界」と「日常」世界との区切りを行うものと考えられる。また、「白い門のある家」において、「緑色」は、「すがすがしい緑色」と描写されているように、主人公が「過去」に出会った人々との遭遇を鮮明にする色としても、機能している。

2.2 マンドリンの音色について

次に注目したいのは、店内で奏でられるマンドリンの音色である。「緑色」のカーテンという視覚の刺激に加え、店内に響くマンドリンの物悲しい調べが、「過去」に出会ったことのある人々との邂逅による感傷的な気分を主人公に喚起させている。

³⁾ 徳井淑子は、「緑色」のもつ「両義性」について言及している（徳井 2006）。また、「緑色」には、「若さ」という意味も包含されており、主人公が、過去の出来事（若い頃）を回想することとも「緑色」のカーテンは関係しているかもしれない。

楽器の音色という点に関しては、「白い門のある家」の店内で奏でられるマンドリンに限らず、「非日常的」な感覚を引き起こすことが知られている。カフェ内で、女性が奏でるマンドリンは、リュートから派生した楽器で、中国や日本の琵琶の元になったとされる。⁴⁾ 琵琶が、死者の霊を鎮魂・慰撫する呪具的な機能をもつことと関連し、マンドリンが奏でる物悲しい音色が、「異界」との接触を容易にする。また、女性と楽器というモチーフについては、芸術の女神像を連想させる。婦人が演奏するマンドリンの音色は、物悲しさを強調するだけでなく、主人公に「過去」を追憶させ、「非日常的」な世界へと導くための装置として機能している。

さらに、このカフェが、「裏通り」に立地しているという点も、一考に値する。つまり、「表」に対する「裏」という対応関係である。「表」を「日常的」な世界とするならば、「裏」は、「非日常的」な世界とみなすことが出来るだろう。「裏通り」という立地が、主人公に、不思議な体験をもたらすことを強調し、後に言及する、男と別れる「四つ辻」という場所の「境界性」とも重なり合う。

また、主人公がカフェの店内に入る際に、前述の「緑色」のカーテンの掛かる入り口を通る際、花の香りが立ち込めており、かつ、マンドリンの音色が響いているというように、それぞれ、視覚・嗅覚・聴覚の刺激を受けている。こうして、多くの感覚刺激を受けた主人公は、「非日常的」な世界へと足を踏み入れることになるのである。しかし、そこで「非日常的」な体験は、「しみりとした、いいところです」という主人公の感想に示されているように、心地よいものであり、仕事での疲労を忘却させ、記憶も薄れていた「過去」を思い出させている。

3. 婦人との邂逅について

店内で、主人公と同行してきた男が席を外し、他の客のいるテーブルに移ったとき、マンドリンを奏でていた若い婦人が、主人公に近づいて話しかけ、その際に、10年前の出来事を語る。主人公が、まだ学校に通っていた頃、毎日、婦人の住む家の窓の下を通っていた。ある日、雨が降って困っていた主人公に、婦人が傘を貸してあげた。そのお礼に主人公が、「外国語で書かれた」本を貸す。婦人は、その本に書かれた言葉が理解出来なかったが、挿絵を楽しみ、今でもその絵が忘れられないと告げる。

この婦人の話を聞いて、主人公はそんな「過去」があったことを思い出し、感傷に耽る。婦人は、迎えの車が来たので、帰宅することになるが、「いつかお目にかけられます」という言葉を残す。婦人との邂逅で、主人公は、「過去」の美しい思い出を記憶の底から蘇らせ、感傷に浸ることが出来た。しかし、この突然差し挟まれる婦人との邂逅や、婦人の語る 10 年前の出来事は、いかなる意味をもつのであろうか。「白い門のある家」においては、直接言及されていないものの、婦人が、主

⁴⁾ マンドリンの誕生については、E・G・パロンの文化史的研究に詳しい。

人公に見せてもらった本の挿絵を 10 年経過した後でも、鮮明に記憶していたことや、主人公を毎日、窓から見ていたという点から彼女が、主人公に対して、好意を抱いていたことが示唆される。ただ、主人公は、10年という月日の経過と仕事等に煩わされていたことから、話しかけられるまで、婦人や、このような出来事があったことを忘却している。

主人公は傘を婦人から借り、一方、婦人は、その返礼として本を借りる。互いに贈与されたものは、ともに「開く」ことの出来るものという共通点をもつ。傘は、周知のように、「開く」ことなしに使用できないし、本もまた、ページを「開く」ことで、その中の世界に入ることが出来る。傘と本という「開く」ことの出来るものが登場することから、主人公の「閉ざされていた」記憶が「開かれる」（思い出される）ことに繋がるのである。10年前に主人公が貸した本に書かれた文字は、解読が困難であるが、婦人は、その文字が示す意味内容をイメージ豊かに伝える美しい挿絵に魅了されている。しかし、前述のように、主人公は、婦人の話を聞くまで、10年前の出来事を思い出すことが出来なかった。一方の婦人は、主人公に見せてもらった本の美しい挿絵とともに、この出来事を記憶していた。ここでは、「過去」の出来事を忘れてしまった主人公（男）と、過去を記憶している婦人（女）という対立が見られる。

また、婦人は、記憶している本の挿絵について、「水車が森の中にまわって、白い花が咲いて、赤い鳥の飛んでいた絵などは、目に残っています……」と主人公に告げる。この言葉は、婦人の本を貸してもらったことへの感動を示すだけでなく、カフェー内に、主人公が入った際の描写と緩やかな連想で繋がれる。まず、「森」という語が、カフェーの入り口にかかっていた「緑色」のカーテンとの連想をもたらす。また、店内で咲き誇っていた「香いの高い花」に、挿絵の「白い花」が対応する。しかし、店内には、「赤い鳥」どころか、「鳥」自体がない。また、物語全体を通して「鳥」は登場しない。推測の域を出ないが、民俗学の成果では、靈魂が、鳥の形象を採ることが知られる。⁵⁾ 婦人を含めた店内にいた客を、すでにこの世の者ではない存在とみなすと、靈魂の象徴としての「鳥」のイメージと重なる。これは、主人公が、同行してきた男が、死んだ従兄そっくりであったことに、店内で気付いたこととも関連しよう。つまり、婦人が鮮明に記憶していた挿絵の構図と、主人公が訪れたカフェーの店内の描写が、緩やかに連結されるのである。

さらには、「いつかお目にかかります」という去り際に婦人が残した言葉が示唆的である。主人公は、もう一度カフェーを訪れようとしたが、その願いは叶わなかった。「いつかお目にかかります」という婦人の言葉が、「別れ」を婉曲に表現しただけのものだったのか。この婦人の言葉は、重要な意味をもつと思われる。この婦人の発言については、主人公をカフェーに導いた男の存在について概観した後で、

⁵⁾ 鳥を、死者の靈魂の象徴とみなすことや、「異界」との関連については、鳥のもつ飛行能力と、一部の鳥に「渡り」の習性があることが作用している（萩原 2001）。

再考する。そこで、次に、主人公に不思議な体験をもたらした男が、何者であったかについて考察する。

4. 男は何者だったのか

主人公を、不思議なカフェーに導いた男は、一体何者であったのだろうか。作中では、男の外見について、主人公は、「人のよさそう」な「なんとなく、親しみを感じさせる」との印象をもち、「小さい時分に別れた自分の従兄に似ているのでびっくり」したと思っている。それと同時に、主人公は「慕わしい気」になったと描写される。初めて男に話しかけられたときから主人公は、男に対して警戒の念を抱いていない。その根拠として、「同じ町内」の者であるという男の言葉や、「人のよさそう」な外見に加え、自分と同じように、仕事に疲れたためにコーヒーを飲みに来たという境遇の共通性から親近感をもって接している。

さらに、明るい店内で見た男の顔が、「南洋の島」で亡くなった従兄に類似していることに気付いたことで、親近感がより一層強調されている。主人公の内面の語りにもあるように、「死んだ従兄」であるはずはないので、「他人の空似」であろうとしているが、その判断の正誤については、作中では明確に語られていない。ここで、男が従兄の霊であるのか否かについて考察するにあたり、従兄が亡くなったのが「南洋の島」であると述べられていることに注目したい。

この点に関しては、未明作品において、「北」に対応する理想郷的な世界として、「南」が位置付けられることが参考となる（滑川 1988）。例えば、「港に着いた黒んぼ」（1921）において、盲目の乞食の少年が、白鳥になって、「南の島」を目指して飛んでいくという設定が見られる。この「南」は、単に、地理的な位置を示すだけでなく、一種の理想郷的「異界」として、未明童話中で描かれることが多い。この「南」の位置付けは、北国に生まれ育った未明の、温暖な「南」に対する憧憬の念の反映と見ることが出来よう。ここで、従兄が「南洋の島」で亡くなったとされる設定は、理想郷的「異界」として描かれることの多い「南」との関連性をもち、主人公に「過去」を想起させるきっかけを作る。直接作中で言及されることはないが、「南」で亡くなったという設定や、肯定的に描かれる男の外見描写等に加え、主人公が、「過去」を懐かしみ、心が洗われるような体験をするという展開とも連動し、男が亡くなった従兄本人である可能性を濃厚にする。

また、主人公に 10 年前の出来事を語る婦人やその他の客も、直接明言されないが、どことなく「この世の存在」ではないような印象を与える。婦人も、10 年前と同じく、マンドリンを持ち、「若い」とされている。また、去り際に発した「いつかお目にかかります」という言葉が、主人公が亡くなった後で、「あの世」での再会を示唆しての発言とみなすと、婦人の「異界」の存在としての属性が補強される。とするならば、他に店内にいる 3、4 人の客も、すでに亡くなった人物達である可能性がある。この点に関連して、続いて、タイトルにもなっている「白い門のある

家」について考察したい。

5. 「白い門のある家」は、何だったのか

5.1. 「白」の象徴性について

主人公は、男に連れられ、カフェで懐かしい人々にめぐり会った。そして、再度カフェを訪ねようとするが、二度と主人公はカフェに行くことが出来なかった。また、主人公をカフェへと誘った男の住む「白い門のある家」を発見することも出来なかった。これは、主人公の家族や、友人達が言うように、「夢を見た」だけだったのであろうか。主人公が、男と「四つ辻」で別れる際、男が、「三軒めの奥にはいったところですよ」と言うが、後日、そこには「白い門のある家」は存在していなかった。作中での描写を見ると、主人公は、白い門の中に男が入っていくところを目撃したが、男の住んでいる家自体を目撃した訳ではない。タイトルには、「白い門のある家」となっているが、主人公は「白い門」しか見ていないのである。また、「白い門」については描写があるが、家については、男の口から語られただけである。ここで、「白い門」が作中において重要になってくる。

「白い門」というと、「天国」等の肯定的な他界の入り口を連想させる。また、「門」だけでも、この世とあの世を結ぶものとして、世界各地の伝承に見られるモチーフであるが、ここでは、「白」という色彩が強調されている。この「白い門」の作中での機能を考察するにあたり、「白」という色彩の象徴性を参照する。「白」という色彩のイメージとして、今日では、「清浄」や「純真」、「無垢」等の好ましい意味で理解されることが多い。しかし、このような肯定的な「白」のイメージは、比較的新しいものである。この「白」のイメージの転換には、明治以降の西欧文化、主としてキリスト教文化の流入・浸透が、影響を与えている（宮田 1994、小林 2000など）。「白」という色は、本来は、葬儀や儀礼時に用いられる「禁色」であり、忌避された色であったことが指摘されている。未明も、「白い影」（1923）という作品の中で、鉄道事故等の災いをもたらす「白い影」という謎の存在を登場させており、「白」という色の否定的側面を描いている。

このように、「白」は、本来、「死」や「異界」と結び付いた色であったのだが、文化接触によって、肯定的な意味をもつようになった。「白い門」というのは、「白」のもつ「死」や「異界」といった負の性質とともに、「清浄」、「無垢」といった正の性質とを併せもつ「両義性」を帯びているということが出来よう。この「白」の象徴性は、カフェのカーテンの「緑色」が有していた「両義性」とも重なってくる。作中での「白い門」は、「天国」を連想させ、「浄化」の念を抱かせる。しかし、「南洋の島」で亡くなった従兄に似た男が住んでいるという設定から、「死」の連想とも結び付いている。

5.2. 辻の境界性について

「白い門」というモチーフに加え、男と「四つ辻」で別れたという設定もまた、男がこの世の存在ではなく、「異界」の存在であることを示唆する。「四つ辻」に限らず、「辻」は、「異界」と結び付いた場所としての性格を帯びている。赤坂憲雄は、「辻は、さまざまな霊のあつまる境界」であり、鎮魂儀礼や、芸能が行われた場であることを述べている（赤坂 1994）。⁶⁾ 主人公が、境界性を帯びた場である「四つ辻」で別れ、男がそこに立っている「白い門」に入っていくという設定も、「白」の帯びる「境界性」と併せ、男がこの世の存在ではなく、死んだ従兄その人であることを一段と補強する。また、婦人が奏でていたマンドリンが、琵琶へと派生したという文化的背景からも、琵琶語りによる鎮魂や、その語りの場であった「辻」との関係が想起され、男が、「異界」の存在であることを裏付けている。

また、主人公は、男と別れた後、自宅に帰り、眠りに就いている。これは、時間が深夜を過ぎていたために、就寝したと考えられるが、「非日常」の世界である「異界」から「日常」へと転換するという意味をも有していると考えられる。⁷⁾ このように、「白い門のある家」は、「白」の象徴性を織り込み、幻想性を高めるだけでなく、主人公と男がそれぞれの属する世界へと戻るための装置と言える。

6. 飲まれないコーヒーについて

主人公は、当初、仕事に疲れたので、コーヒーを飲み「顔なじみのカフェー」に行こうとするが、時間が遅く、すでに閉まっていたために、不思議なカフェーを訪れることになる。そこで、どこかで出会ったことのある人々に邂逅し、「過去」に想いを馳せるが、本来の目的であったコーヒーを飲んだという描写はない。これは、単に疲労を忘却させるような出来事が起こり、主人公が感慨に耽ったためだとも解釈出来る。しかし、一方で、このカフェーが「異界」に属しており、男を含め、そこで遭遇した人々が、すでに「この世」の存在ではないとすると、主人公がコーヒーを飲んだという描写がないことは、別の意味をもつようになる。同じく、未明の筆による「大きなかに」（1922）では、おじいさんが、帰宅途中、雪の夜道の海岸近くで見知らぬ男達と出会い、中身の無い「からっぽ」の蟹を貰うのだが、その際に男達とともに酒を飲んでいる。その後、おじいさんは衰弱し、北国に春が訪れても、元気がなくなっているという結末を迎えている。これは、おじいさんの衰弱と、死期の近づいたことを示している。ここで、おじいさんが見知らぬ死者とおぼしき男達に交じり、酒を飲んだことは、死者の国の食物を口にすると、この世に戻

⁶⁾ 赤坂は、「辻」という場が、「単に共同体をその外部から分かつ境界であったばかりか、現世と他界を仕切る境界でもあった」と述べ、「世界を仕切る境としての辻」に言及している。

⁷⁾ 根本美佐子は、「異界」から「この世」への切り替えとして、「眠り」の場面について言及している（根本 2004）。ただし、小川未明については言及していない。

れなくなるという「黄泉喫食」を犯したことになるため、次第に衰弱していったと解釈出来る。⁸⁾

「白い門のある家」に話を戻すと、主人公が、最終的に、本来の目的であったコーヒーを飲むことなく、男と店を出ていることから、カフェーを二度と訪れることが出来ず、男の家にも辿りつけないという展開との関連が見出せるのである。もし主人公が店内で男とコーヒーを飲んでいたら、もう一度、不思議なカフェーを訪れ、懐かしい人々と再会し、男の住む「白い門のある家」にも辿りつくことが可能となったかもしれないが、その再会は、主人公の「異界」からの帰還の可能性を失くす。しかし、ここで描かれる「異界」としてのカフェーは、死や恐怖といった否定的な側面を強調しておらず、むしろ、主人公に疲労を忘れさせ、「いろいろなこと」を思い出させた。このカフェーは、主人公にとって、「しみりとした、いいところ」であった。つまり、異形の者が満ち溢れた場所ではない。現に、案内してきた男も「居心地のいい家」、「ちょっと、気持ちのいいカフェー」と呼んでおり、主人公もそれに賛同している。

ここで、一つ気になる箇所がある。作中で男が、二回も「カフェー」のことを「家」と呼んでいることである。一方、主人公は、「顔なじみのカフェー」を「家」と呼んでいる。「家」という語に関連して、精神分析の祖・フロイトは、論文「不気味なもの」の中で、“Unheimliches”（不気味なもの）という語が、「居心地が良い、親しいもの、家」の否定形を採ることに言及し、そのメカニズムについて考察している（フロイト 2006）。このフロイトの考察を「白い門のある家」に援用すると、主人公や男がカフェーのことを「家」と呼んでいることから、「見慣れた、親しい」人々が、「不気味」な存在として出現するものの、主人公にとっては、再会出来たことへの感慨の方が大きかったことを示している。

このように、「居心地の良い家」として、カフェーは、「見慣れた」人々との再会を主人公にもたらず。こうした出来事は、カフェーのことを「家」という語で表現することで、「不気味」となりがちな体験を、「居心地の良い、親しい」ものに変換しており、カフェーが、「異界」でありながら、主人公にとっては、「居心地の良い家」として位置付けられていることを示している。

7. おわりに

以上のように、小川未明「白い門のある家」の「異界」について、作中に現れるモチーフに注目し、「文学人類学」の視点から読み解いてきた。ここで描かれる「異界」は、多くの「異界訪問譚」と同じように、「日常」世界から、「非日常的」

⁸⁾『古事記』における黄泉国神話で、伊邪那岐が、亡き妻である伊邪那美を訪ね、黄泉国に赴くが、「黄泉喫食」をしたために戻れないと告げる。このように、死者の国の飲食物を口にすると、現世に戻れないというモチーフが見られる（吉田 2007）。

な世界へと移行し、最後には、元の「日常」の世界へと戻ってくるという円環構造が見られた。ただし、主人公が訪れた「異界」は、主人公に忘却していた「過去」を想起させ、一種の「安らぎ」を与えていた。主人公は、「かつて、どこかで見たことがある」人々と再会し、「過去」に触れることで、心の平穏を得た。しかし、これら「異界」に属している人々との接触は、懐かしさを喚起するものの、深く入り込んでしまうと、二度と「日常」に戻ることが出来なくなることを意味した。そのことと関連し、本来の目的であるコーヒーを飲むことなく、カフェーを出るという展開が、「黄泉喫食」のモチーフと重なるのである。

このように、象徴人類学や、民俗学の成果を援用し、考察することで、作中での「謎」を読み解くことが可能となった。「白い門のある家」だけでなく、未明の他の作品を読み解く際にも、こうした「文学人類学」的手法を活用することが、今後求められるであろう。

主人公がカフェーで体験したことは、「過去」に浸るという点で、精神分析学における、一種の「退行」と解釈することが可能かもしれない。⁹⁾ しかし、この主人公は、「異界」と遭遇することを通じ、「過去」に浸ることから活力を得た。「過去」を懐旧することは、単なる「退行」ではなく、現在を生きる上で重要性を帯びる。そうした点からも、「白い門のある家」で描かれた「居心地のいい異界」は、特異な「異界」¹⁰⁾ と言えるのである。

⁹⁾ 河合隼雄は、「浦島太郎」を、ユング心理学の立場から読み解き、太郎の童宮訪問を、一種の「退行」現象の象徴的表現と述べる（河合 2002）。太郎の「異界訪問」は、結果的に「悲劇」となるが、「白い門のある家」では、主人公は、「過去」という「異界」に踏み込んだことで、疲労を回復し、一時の安息を得る。

¹⁰⁾ 未明童話における「異界」を論じたものに、厚美尚子の研究があり、「金の輪」（1919）等、3作品に描かれる「異界」像を、民俗学の知見を踏まえて考察している。ただし、「白い門のある家」については触れていない。

参考文献

- 赤坂憲雄『異人論序説』筑摩書房、1994年。
- 厚美尚子「小川未明童話研究—＜異界＞との交流の見地から」『児童文学研究』35号、日本児童文学会、2002年。
- 伊藤博『コーヒー博物誌』八坂書房、2001年。
- 小川未明「白い門のある家」『定本 小川未明童話全集』第1巻、講談社、1976年。
- 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店、2002年。
- 小林忠雄『江戸・東京はどんな色 色彩表現を読む』教育出版、2000年。
- 徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』講談社、2006年。
- 根本美佐子『眠りと文学—プーレスト、カフカ、谷崎は何を描いたか』中央公論社、2004年。
- 滑川道夫「未明童話における北と南の思想」『日本児童文学の軌跡』理論社、1988年。
- 萩原秀三郎『神樹 東アジアの柱立て』小学館、2001年。
- バロン, E・G『リュート 神々の楽器 歴史と実践の研究』菊地賞訳、東京コレギウム、2001年。
- フロイト, シグムント「不気味なもの」『フロイト全集 17 不気味なもの、快原則の彼岸、集団心理学』須藤訓任・藤野寛訳、岩波書店、2006年。
- 宮田登『白のフォークロア 原初的思考』平凡社、1994年。
- 「お月さまいくつ」『ヒメの民俗学』筑摩書房、2000年。
- 山口幸祐・藤本紗貴子「未明童話における「色彩語」について—調査結果からの考察」『富山大学人文学部紀要』46、富山大学、2007年。
- 吉田敦彦『日本神話の源流』講談社、2007年。

The Other World in Ogawa Mimei's "Shiroimon no aru Ie"

DOAI Hironori

Summary: The study of the fairy story "Shiroimon no aru Ie" written by Ogawa Mimei has not been advanced, although it is one of his famous works. This paper discusses the importance of the symbols such as gate, street, colors and other motifs in his story by reference to achievements of anthropology and folklore. I will also point out meaning of the concept "the Other World", which is important for interpretation of this story. Moreover, this research will also be the interpretation of Mimei's other works.